

永遠の命の希望説教①

詩編 16 編 8 節～11 節

わたしは絶えず主に相対しています。主は右にいまし わたしは揺らぐことはありません。わたしの心は喜び、魂は躍ります。からだは安心して憩います。あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず 命の道を教えてください。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い 右の御手から永遠の喜びをいただきます。

テモテへの手紙二 4 章 6 節～8 節

わたし自身は、既にいけにえとして献げられています。世を去る時が近づきました。わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。今や、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれをわたしに授けてくださるのです。しかし、わたしだけでなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます。

1. わたしは絶えず主に相対しています

本日より、「永遠の命の希望」というテーマで 10 回連続で主題説教をしていきたいと思います。今日、私たちが聞いていきます御言葉は、詩編の第 16 編の 8 節から 11 節であります。先ほど読んでいただいた 8 節をもう一度お読みいたします。

「わたしは絶えず主に相対しています。主は右にいまし、わたしは揺らぐことはありません。」第 16 編は、その全体を通して神により頼むという信仰告白の歌であると言われております。今日はこの詩の後半の 8 節の信仰告白に注目したいのです。「わたしは絶えず主に相対しています。主は右にいまし、わたしは揺らぐことはありません。」

先々週、私たちは、諏訪教会 112 周年記念礼拝において、今年目標聖句から御言葉を聞いてまいりました。そこでわたしたちが改めて知らされましたこと。それは永遠の命とは、まず第一に神との人格的關係であるということでもあります。神は天におられ、私たちは地上にいる。その天と地のうんと遠い隔たりを越えて、神御自身がわたしたちを救うためにこの地上に降りて来てくださったということがイエス・キリストの受肉において起こったのです。そしてキリストの十字架の死と復活は私たちの罪のための十字架の死であり、わたしたちに新しい命を与えるための復活であります。この主イエスの十字架と復活という救いの恵みを、感謝して受け止めるのです。そこから、わたしたちには、新しい意識が芽生えます。私の人生はもはや自分だけの人生ではない。そうではなく、わたしのために十字架で死んで復活してくださった方のために生きるのだと。

また、そこから自ずとこのような意識も与えられていきます。神が与えてくださったこの地上での人生、神様によって始まった私の地上の歩みは、神様によって終わる日がある。私の人生は神によって終えさせていただくのだと。そうであるなら、神に与えられた命を、神のために生き、神のために死のう。生きるにも死ぬにも、神の御心のままに、ゆだねて行こう。そのような信仰が育まれていきます。そして、辛いことがあったとしても、自暴自棄になって自殺したり、老後は体も衰えて何もできないなどと考えず、その心身も最後まで、くたくたになるまで神様に用いられたいと願うようになるということです。ある人は、たくあんのようにくたくたになるまで神様に用いられたいと語っておりました。私も本当にそうありたいと思います。「わたしは絶えず主に相対しています」という心が私たちの内に起こるとき、そこからそのような心が生まれてくるのであります。

この詩は、初めに「ダビデの詩」とあります。本当にダビデが書いたかどうか、ということに関しては問われるべきことかもしれませんが、少なくとも、ダビデの信仰をモチーフとして書かれた詩であるということができ

るでしょう。ダビデはイスラエルを統一したとき、神のための神殿を建てようと考えます。しかし主はこのようにダビデに語られます。「わたしの僕ダビデに告げよ。万軍の主はこう言われる。わたしは牧場の羊の群れの後ろからあなたを取って、わたしの民イスラエルの指導者にした。あなたがどこに行こうとも、わたしは共にいて、あなたの行く手から敵をことごとく断ち、地上の大いなる者に並ぶ名声を与えよう。」(サムエル記下7章8節～9節)つまり主はダビデにこう語ったのです。あなたは新しい神殿をつくることによってわたしに恩返しをしようと思っているのかもしれないが、そのようなことをわたしは頼んではいない。ただ、わたしが、貧しい羊飼いであったあなたをイスラエルの王として選んだのだ。そのことを深く受け止めなさい。この主なる神の御声を聞いたダビデは、心からの感謝の祈りをささげます。「主なる神よ、何故わたしを、わたしの家などを、ここまでお導きくださったのですか。」このようにダビデは、神が、選ばれる資格のないような自分をあえて選んでくださり、イスラエルの王として用いて下さり、そのダビデの家が揺るぎなきものとされるという約束を心から感謝して、主にとらえられた自分を心から喜んでいきます。私など何者なのでしょう！と。分不相応な恵み。ちっぽけな存在であるこの私に、神が恵みをもって導いてくださっているということへの喜び。それがダビデをとらえているのです。

この時、ダビデが祈ったように、わたしたちもまた、信仰を与えられた者は皆、毎日朝に夕に、神の御言葉である聖書を読み、祈ることが求められます。それこそが主の恵みへの応答なのです。そのような祈りの中でこそ、わたしたちが分不相応な恵みを与えられた者。小さき者であったのに神によって選ばれた者であるという感謝と謙遜が与えられていくのです。

2. 主は右にいまし、わたしは揺らぐことはありません

このように、主に相対しているという意識の中で、日々の生活を歩むとき、主は聖霊を通して私たちの生活の中に介入してくださっているということ、わたしたちは信仰において悟ります。それは私たちの誰もが経験できることであります。さまざまな出来事を通して、主はわたしたちの歩む道を導いてくださることがわかってきます。わたしたちの心に、神様の御声を聞く耳。神様の御業を知る目が備えられていくのです。何か神がわたしたちの歩みに介入してくださった時には、ああ、この出来事は神様が私に働いてくださったことなのだ……とはっきり自覚するのです。そのような経験を通してわたしたちは、この詩人と同じところに立って告白できるのです。「主は右にいまし わたしは揺らぐことはありません。」主が右におられる。そう詩人は告白しております。右とは、神が私たちの保護者であるということを表しております。また、神への信頼をあらわす言葉でもあります。人生の端々において、神様の御心を尋ねながら歩むとき、ちょうど良い時に、主がちょうど良い道を拓いて下さり、必要なものを与えて下さったり、人生を共に歩むパートナーを与えて下さったり、あるいは仕事を与えて下さったりする。結婚生活も、会社での働きも、そこでなお苦しいことや失敗や、人間関係の摩擦などがあったとしても、たとえ失敗や挫折と思えるような出来事の中でも、次の道を拓いて下さり、悔い改めの心を与えて下さり、新しい力をもって再出発できるように導いてくださるのです。

この説教を作成する中で、使徒パウロの生涯を書いたものを読みました。そこで、使徒パウロにも空白の期間があったと書いております。ガラテヤの信徒への手紙の第1章の16節以下にこのようにあります。「御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようになされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。」(16-17)

復活のキリストと出会い、使徒としての召命を受けてから、パウロの人生にも空白に見える時期がありました。それがこの時でありました。アラビアに行き、その後、ダマスコに戻った。そこに長い月日が流れたのです。空白と言っても何もしなかったわけではなく、このとき、パウロは主イエスから与えられた使命とこれから先のことなどについて、神様に祈り、心の中を整理するためであったと言われております。その後再びダマスコに戻

て、三年の歳月を過ごしたのです。その後エルサレムに使徒たちを尋ねた。使徒ペトロと主イエスの兄弟であったヤコブの二人にしか出会っておらず、その時の会合の記録はありません。そしてその次に記録の上でパウロが姿を現すのは十四年後のことであったそうです。その空白の期間はいったいどのような意味があったのか。この書物を記した先生はこう語ります。……誰にでも生涯の中に空白としか見えない時期がある。それは病気の時であったり、事業不振の時であったり、何かに失敗した時であったり、ともかく思うように行かない時期である。ではその時期が無駄であったのかということそうではない。この時期があったればこそ、これから先の彼の活躍があった。神から信仰を与えられている者には、空白の時は存在しない。信仰者とは、神の御支配の下にある者のことである。神様の御支配には空白はない。空白と見える時も尺取虫が前に進むために身を縮めるように、なくてはならない準備の時なのである。信仰には決して失望がない。また、空白と呼ぶときもない。そのように語ります。そうであるなら、わたしたちの人生で、空白と思えるような時にも、意味があったのだ。それがむしろ今の私をつくっているのだと、前向きに考えることもできるのではないだろうか。どのような時にも、主は私の右におられました。そして皆さんの右にもおられたのです。だからこそ私たちは今ここにいます。

私たちは神様と出会うことによって、そして神に相對し、神がいつも右にいますことを、その信仰生活の中で知らされていきます。それによって二つの相反する心に導かれていくと思います。その一つは、私が、罪人であり、主の恵みなしにはひと時も、生きることができないような存在であるということです。そのことを本当に悟ることが真の謙遜を私たちの内に育ませていきます。しかしそのようなわたしが、神に愛され、罪を赦されて、主の栄光をあらわす者として用いられ、主に期待され、大切にされ、あなたは私の目から見て尊い存在なのだ、と言われていることを自覚する者となります。この二つの相反するとも言える意識のゆえに、私たちは主に与えられた人生を、主にささげていくこと。自分の自我を中心に生きるのではなく自分よりも大切な方のために、わたしという存在をいついかなる時にも肯定してくださる方のために生きる者へと変えられていきます。そして、主から与えられた人生を、何があっても最後まで生き抜こうとする強い意志が与えられていくのです。病気のときも、最後まで、絶望することなく、与えられた人生を生ききろう、主の御助けによって、最後まで戦い抜こうという心が与えられていくのです。もちろんそこにはさまざまな葛藤があります。人間的弱さが付きまといまいます。しかしそれにもかかわらず私たちには、主がその右にいますゆえに、私たちの心の根本の部分においては揺るがないという経験を与えられていくのであります。神が私たちの右にいますということが、神が私たちの人生の全ての主権を担ってくださっているのであり、神の御許しなしにはなにも起こらないということを知らされるからです。そしてそのような人生の中で起こるさまざまな出来事は、先が見えないような苦しい出来事であったとしても、その責任を神が取ってくださると信じるがゆえに、平安が与えられるのです。9節の「わたしの心は喜び、魂は踊ります。体は安心して憩います。」という言葉は、そのような神の御手の内において起こることであることを知らされたがゆえの平安なのです。それは、何か楽しいことを始める時に起こるような心の喜びではありません。むしろ、苦しみや悲しみの中でなお、心が落ち着き、慰められているということです。苦しみの中の平安。それは神が私たちに与えてくださるときにのみ起こる平安であり、天からの平安であります。神様がそのような平安を与えてくださるといふ経験をこの詩を書いた詩人もしたのでありましょう。

3. 命の道を教えてくださる主

詩人は、恐らく人生の晩年を歩んでいるのだと思われます。自分が、この地上を去る日が近づいたことを彼は悟るのです。しかしなおそこではっきりと確信しております。「あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず 命の道を教えてください。」(10-11)ここでは陰府、また墓という場所が示されます。そこはどちらも、神がもはやおられない場所、神の支配の及ばないところという意味で受け止められていたのです。死をもって私たちの地上の生が終わりを告げます。肉体は朽ち果てます。しかし実は、それよりも恐ろしいことは、神の命から途絶えるということです。神の支配から、離れてしまう。それこ

そが本当の死なのです。

しかしキリストの復活を信じる私たちには、死に際しても、主が私たちと共におられることを信じる事が許されています。私たちの地上での命が終わってもなお、主なる神が命の道を教えてくださっている。この道を歩みなさいと、わたしたちにも道を示してください。その道には主イエスがいつも右におられる。そのような、命の主と共に歩む道がある。それゆえに、最後に詩人は喜びをもって告白します。「私は御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い 右の御手から永遠の喜びをいただきます。」詩人には、晩年においてなお新しく深い喜びが死を越える将来において必ず与えられると確信しております。地上において、主なる神との交わりに生きた詩人にとってはもう、自分の人生が死によって途絶えてしまうなどということは到底思えないのです。私たちに今、与えられております主との生きた交わり。そこに、すでに永遠の命があるからです。

4, パウロの晩年

さきほど、新約聖書はテモテへの手紙二の第4章6節から8節までを読んでいただきました。6節以下をもう一度お読みします。「わたし自身は、既にいけにえとして献げられています。世を去る時が近づきました。わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。」パウロは、自分がこの地上を去る時が近いことを悟っていたようです。そこで、自分の生涯を彼は自分自身を神の御前にささげ切ったと言える人でありました。彼は自分自身を全て主にささげたのです。決められた道。主が私たちのために決めてくださった道。それが、命の道であります。パウロにとって死とは、神様からのお召しを受けて、魂のふるさたである神の御許に帰ることでありました。彼は神様によって地上に生を与えられ、神からの使命に励み、そして全ての事を神に委ねて召されたのです。ここに、私たちキリスト者の死生観があります。

わたしたちはパウロの歩んだ同じ命の道を歩んでいるのです。時代や場所。それぞれに違う人生であっても、私たちは共に、主が与えてくださる命の道を確かに歩んでいるのです。8節でパウロはこのように語ります。「今や、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれをわたしに授けてくださるのです。しかし、わたしだけでなく、主が来られるのをひたすらに待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます。」

私たちもまた、神から、義の栄冠を受ける日が来ます。義の栄冠とは、キリストの十字架と復活を信じるわたしたち一人一人に与えられる神からの栄冠です。将来、審判の日に、一人一人に主イエスが、おめでとう、永遠の命に定められた者たちよ、と言ってわたしたちの頭に載せてくださる。そんなことをイメージしてもよいのかもしれませんが。それはこの地上のどんな成功よりも、どんな地位や名誉を与えられることよりも素晴らしいものです。なぜなら義の栄冠は世の富と違い、尽きることはないからです。永遠に輝く名誉であり、喜びであるからです。それが、命の道を歩む者に与えられる約束なのです。今、私の右にいましたもう主が、将来与えてくださる栄冠がある。この世の栄冠とは違う、神が与えてくださる栄冠を喜んで待ち望んでいきましょう。お祈りをいたします。

教会の頭であられる主イエス・キリストの父なる御神様。あなたがいつも私たちと相対して下さり、私たちの保護者、わたしたちの魂の責任者として命の道を歩ませてくださっていることを心から感謝いたします。私たちの罪や、失敗をも、執り成して下さり、道を拓き続けてくださいます。その恵みを心から感謝いたします。あなたはダビデ王の人生も、パウロの人生も、祝福し、最後まで豊かに導いてくださいました。命の道を歩ませてくださいました。どうか主よ、わたしたちの人生をも、最後まで導いてください。そしてあなたが与えてくださる義の栄冠を、心から待ち望む者とさせてくださいますように。

今日から始まります一週間を豊かにお導きください。コロナ禍が猛威を振るっております。わたしたちの健康をお守りくださいますように。病気の方々の上に、リハビリをしておられるの方々の上に、あなたの慰めと励ましが豊かにありますように。言い尽くしません感謝と願いを主イエス・キリストの御名によって祈り願います。アーメン